

北条政子の熊野詣とその意義

田 端 泰 子

はじめに

熊野詣とは熊野本宮、新宮、那智三社への参詣の旅をこう呼ぶ。熊野は多くの人々が参詣し始める以前は、山伏の修験の場であったが、一〇世紀から庶民や貴族、院の参詣が記録に留められ始める（『いぬほし』、『三玉絵詞』など）。

熊野詣に関する研究は、民俗学、歴史学、宗教学などから、また一遍が熊野詣をした部分に関する絵画が『一遍聖絵』に残っていることから、絵画史研究の面からも多くの研究がなされてきた。特に五来重氏の『熊野詣 三山信仰と文化』⁽¹⁾を初めとして、宮地直一氏の『熊野三山の史的 research』⁽²⁾、児玉洋一氏の『熊野三山経済史』⁽³⁾、新城常三氏の『社寺参詣の社会経済史的研究』⁽⁴⁾、小山靖憲氏の『熊野古道』⁽⁵⁾など、多くの研究成果が積み重ねられてきた。それらの中でも、平安後期・院政期の熊野詣のルートを実際に歩いて探査し、史料と比較検討され

た戸田芳実氏の研究に依拠しつつ、史料は少ないが鎌倉期の北条政子の熊野詣とその背景にある北条政子の執政と彼女の役割について考えてみたいと思う。

戸田芳実氏は、一九六六年から逝去された一九九一年までの二十五年間、熊野など古道の踏査を行われた。遺稿として残された原稿を、鈴木景二氏が丹念に史料の確認、誤記・誤植の訂正、注の増補などを行われ完成したのが『歴史と古道 歩いて学ぶ中世史』⁽⁶⁾である。

戸田氏は文化庁の事業すなわち一九七八年から八三年までの五年間の道の調査、補修、復元に、地元住民・自治体が協力したことに刺激され、自ら熊野の古道を何度も歩き、「熊野道の主体は：滝尻王子から本宮に至る中辺路と、那智山から本宮・湯峰に通じる大雲取・小雲取の道」で、「一〇〇キロに近い古道」であったことを論証したのである。

次いで平安初期（一〇世紀）以後の増基法師の『いぬほし』、宇多院など院や貴族（藤原行成、藤原為房、藤原宗忠、源師時、藤原経房、藤原定家）

の参詣記を調べて、平安から鎌倉初期に至る期間の熊野道がどこであったのか、道中、貴族はどのような祈りを行ったのか、何を見聞きしたのか、天候や行路の不順、困難をどのように乗り切ったのかなどを詳細に明らかにした。

この戸田芳実氏の先行研究や五来重氏らの熊野詣に関する諸業績を導きの星としつつ、史料の残存状況は極端に少ないが北条政子の熊野詣について論じてみたいと思う。

いっぽう北条政子に関する研究は多い。⁽⁷⁾筆者も『幕府を背負った尼御台 北条政子』を以前執筆して、大筋は論じ尽くしたが、この前著で記述し残した政子の仏事執行と、その背景にあった彼女の人間性について本稿で論じてみたいと思う。

一 院政期・鎌倉初期の熊野詣

中世院政期の熊野詣について述べる前に確認しておかねばならない事実は、熊野本宮の位置やその周囲の景観、本宮に至る行路が現在とは異なる点である。明治二十二年（一八八九）の大水害以前は、本宮は熊野川と音無川が合流する地点「大斎原」^{（おおのほら）}にあった。しかしこの水害で本宮大社は現在の地に移転したので、旧社地には基壇と石祠のみが残っているという事実である。このことを論証するのは『一遍上人絵伝』⁽⁸⁾であり、本絵巻によると、旧本宮大社の周囲は切り立った山肌や岩石で埋められており、熊野川の河原に船着場があつて、舟で新宮まで上下したことが伺えるのである。

院（上皇）の熊野詣は宇多院の延喜七年（九〇七）十月のそれが嚆矢である。紀路を採ったが、船にも乗り、困難を極めた熊野詣であり、必要物資も都の穀倉院から綿三百屯・調布二百端を支出し、それを持参してまかかったという。

長保元年（九九九）十一月の花山院の熊野詣も『権記』（藤原行成の日記）によると、伊勢經由の船旅を採るようにとの院の仰せがあつたことが記されているので、一〇世紀の宇多・花山両院のころ、紀路の陸路は難路とされ、それを避けて、「紀伊・伊勢共にある区間海路を用いた」と戸田氏は推定している。

寛治四年（一〇九〇）正月に行われた白河院最初の熊野御幸以後、院や貴族の熊野詣の参拝方式が定式化される。白河院は正月二十二日に鳥羽の御精進所を出発し、一ヶ月余の二月二十六日に鳥羽殿に還御している。その後、白河院は先達を務めた法印権大僧都増誉を熊野三山検校に、熊野別当長快を法橋に補任し、また紀伊国の田畠百余町を熊野山に寄進している。⁽⁹⁾これについて戸田氏は「熊野山はこうして院権力に組み込まれた」と評価し、これを嚆矢として白河院九度、鳥羽院二十一度、後白河院三十四度、後鳥羽院二十八度の院熊野御幸が繰り広げられたと述べている。

院が詣でた院政期の熊野路は、京都・本宮間が約300 km（72里余）、本宮・新宮・那智の三山一周が約120 km（28里余）、これに帰路を加えて、京都からの往復全行程は700 kmを越える長途の聖地巡礼の道であつた。戸田氏はまた、熊野先達は参詣人を嚮導して熊野路を幾度となく往来し、路次の諸王子（九十九王子と呼ばれる）での礼拝や水辺の祓いなど、

道中の所作と禁忌を励行させる全権を握っており、巫女を補任する権限を持っていたこと、さらに熊野への道中の各所で、参詣人のための「道者米」や、熊野の住僧・客僧に施す「僧供米」などを、結縁のためその人の志に応じて拠出するように、沿道住人や往来の人々に呼びかける勧進を行っていたことを明らかにしている。

さらに、院御幸開始時点では死穢を忌むタブーが強化されたが、その後それは緩和され、参詣人の浄・不浄を嫌わない中世熊野信仰のかけがれが形成されたとする。

この点については、康治二年（一一四三）正月七日付の「藤代王子巫女」の補任状¹⁰の存在が、巫女をはじめとして女院などの参詣を許す熊野詣の男女平等性を開きにつけになったのであろうと推察する。なおこの時代、巫女は「八人女」（八乙女）と呼ばれたように多数いて、そのトップは「惣之一」と呼ばれていたこともわかる。

また、中下層熊野先達は熊野山に属する修行者や大衆であり、五人から八人の集団で、街頭など各所で「熊野権現御垂迹縁起」などを説いて信心や参詣を勧めながら、写経・造営・僧供などの資の奉加を募る勧進を展開しており、それは「きわめて活発で執拗」であった。彼らはまた「熊野僧供米」を各地にプールして「出挙米」（高利貸米）として運用したことを戸田氏は著書『初期中世社会史の研究¹¹』で述べている。

熊野へは院や男性貴族のほか、女院や一般の男女が平安期から院政期にかけて、多数参詣していることが、貴族の参詣記から伺える。このように熊野の神は男女を共に受け入れている。その理由はどこに

あったのであろうか。

熊野は「蘇りの地」といわれる。その根拠は神話にあり、イザナギ、イザナミの夫婦神が天照大神と素戔嗚尊をもうけたあと、イザナミが第三子として「火の神」を生んだために焼死してしまい、夫神と別れて黄泉国^{よみのくに}に住むようになり、いつぼう「火の神」は母を焼死させたため、父神に斬り殺されたということになっている。このイザナミは熊野に葬られたといわれており、熊野は黄泉国の入口で、ここには多くの神や先祖の霊が集まり、また生まれ変わる「蘇りの地」であるという言い伝えである。

この言い伝えから見えてくるのは次の事実である。女性は子を産む場合、時には「産死」することもあるから、そうした女性の靈魂を慰撫し、できうるならば蘇ることを神々に祈願する地として、熊野は院・女院以下一般百姓・下人に至る人々の信仰を集めたと推察できる。平安前期の熊野は「死者の霊のこもる聖地」として修験者、修行僧の道場となった。こうした熊野の位置は、中世、「女人禁制」を掲げる高野山・比叡山などの霊場とは逆の、男女を受け入れる聖地、蘇りの地として多くの人々の心に響いたのであろう。

近世になって熊野信仰を広めたのは熊野比丘尼である。曼荼羅を持参して各地で「絵解き」をしたことが、熊野への信仰の広がりを支え続けた。これも熊野が女性を排除しなかったことが、熊野に詣でる巡礼の女性たちを増やした理由であると考ええる。

院・天皇・女院の大掛かりな熊野詣を支えたのは、御師たちばかりではなく、熊野街道やその沿道の藤原摂関家の荘園住民であり、一般

の参詣者の中にも「女人・盲者・癩病者」がいたことは、五来氏以来、ほとんど全ての研究者が言及している。なぜこれらの歩行困難な人々が熊野の山道を歩くことができたのであろうか。この問題について五来氏は「かきやみ（癩病者）」の乗る土車を「千僧供養万僧供養にひとしい功德」として引き、熊野へ送り継ぐことが「業病者の宿願成就に合力」することであり、同時にそれは引いた人の現世利益と往生決定に繋がると見ている。「五体不具」は前世の「業罰」であると見なされた古代・中世の人々にとって、戸田氏は「身障者にとって熊野の超人的苦行の旅が、かれらのほとんど唯一の希望の道」であり、かれらに対して「上下の参詣者がみずからの功德のために行う、さまざまな援助の手がさしのべられた」と述べる。このように沿道荘園の住民や一般参詣者のさまざまな援助によって、身障者の熊野詣という極めて困難な山岳参詣が成就されてきたことが、熊野参詣の大きな特徴であるといえよう。

二 源頼朝時代の源家と熊野の関係

源頼朝は、源平合戦の最終段階つまり義経が讃岐国屋島で平家軍を破った屋島の戦いのころ、鎌倉で御台所政子と共に「南御堂」（勝長寿院）の落慶供養に臨み、その後熊野山に三河国の竹谷・蒲形両荘を寄進している。

勝長寿院は頼朝が文治元年（一一八五年）、その父義朝の菩提供養のため鎌倉雪の下に建立した寺である。

いっぽう竹谷・蒲形の二荘は、元は開発領主である散位俊成が熊野山に寄進した荘園で、熊野別当湛快がその地の領主となり、湛快はその女子に譲与したという。女子は初め「行快僧都」の妻となり、後「前薩摩守平忠度朝臣」に嫁したという。平忠度は一ノ谷で前年二月に「誅戮」されたので、その所領は「没官領」として「武衛」（源頼朝が拝領した。そこで「領主女子」（湛快の女子）は「本夫行快」に懇望し、「早く子細を関東に愁い申してこれらの二荘を安堵させてほしい、そうならば将来行快の子息（自分の生んだ子息）に譲る」と約束したので、熊野の「行快僧都」は、熊野から使者を遣わして、頼朝に言上した。行快は自らは「六条廷尉禅門（源為義・頼朝の祖父・外孫）」であると述べている。つまり為義の子行範が行快の父であるという。この訴えを聞き、頼朝は「於源家其好已異他」（源家との特別の縁が重なっている）との理由で、すぐに両荘を女子に与えている⁽¹²⁾。

つまり勝長寿院は頼朝の父義朝の菩提を弔うために建てた寺院であり、熊野山領の二荘は祖父源為義の外孫の持つ荘園であるので、同じく源家の祖先供養のためにと、すぐさま行快に所有権を安堵したことがわかる。

湛快は約十年前の一七四年に亡くなった高名な熊野別当である。その女子が、やはり熊野別当であつたと思われる為義の外孫行快の妻になつていたとすれば、源家の子孫が熊野別当の娘と婚姻し、その娘の所領の安堵を源家に求めたのは当然の行為であつたといえよう。

『吾妻鏡』は勝長寿院落慶法要の日に、先の熊野別当湛快の娘に対して三河国竹谷・蒲形両荘を安堵したことに対して、「且又御敬神之故

也云々」と頼朝の熊野神を敬う心の故であろうと記しているが、頼朝にとつては、父義朝・祖父為義という源家先祖の供養の意味合いが大きく、そのための「南御堂」の建造と、二荘園の熊野社への寄進であつたと考えられる。

頼朝が熊野領について生存中に指示した例は他にも若干存在する。

文治二年（一一八六）三月の関東知行国の内、「乃貢未済莊々注文」の中に熊野領下総国「そうさみなみのしょう 匝瑳南莊」があり、六月熊野別当領として「上総国あひのしょう 畔蒜莊」が『吾妻鏡』に出現する。後者の地頭職は、頼朝が熊野別当に与えたものである。しかし「上総介」（足利義兼）と和田義盛の兩人が地下を管領して、本所熊野社に年貢を運上しないので、頼朝は兩人に対し熊野社への年貢の上納を命じている。

文治五年（一一八九）三月に、頼朝は後白河院の院宣に対して二通の「請文」を出した。その内の一通は「熊野御領播磨国浦上莊」の年貢についてであり、浦上莊の年貢は「湛政」が徴収し貢納する習いであり、また「地頭職」停止の荘園であるので、梶原景時の地頭職を停止すべき旨を、院から直に「庄家」に命じていただきたいと頼朝は述べている。⁽¹⁵⁾ 浦上莊は「平家没官領」の内に入っているが、頼朝は熊野社領であることを再確認していることがわかる。

建久五年（一一九四）閏八月十二日条には、「但馬国多々良岐莊」を初めて「地頭補任之地」と為し、「熊野鳥居禪尼」に与える事を幕府は決定した。その理由を『吾妻鏡』は「是依所望也」と記しているので、禪尼自身が望んだためであつたことがわかる。⁽¹⁶⁾

約四十日後の九月二十三日条に、禪尼とこの荘園についての詳しい

記述がある。それによると「多々良岐莊」はもともと「源宰相」（源兼忠）の所領であつた。ところが源義朝の姉「熊野鳥居禪尼」の強い所望により、頼朝は禪尼に地頭補任の下文を遣わしたが、領家の年貢課役などは懈怠があつてはならないとの書状を、この日に遣わしたという。⁽¹⁷⁾ 「多々良岐莊」は但馬国朝来郡にある荘園で、現在の兵庫県朝来郡朝来町多々良岐・奥多々良木一帯にあつた荘園であり、弘安八年（一二八五）「但馬国太田文」時点の本家は安嘉門院、領家は鎌倉幕府、地頭は加治輔朝、莊田は十六町であるという。⁽¹⁸⁾

この熊野鳥居禪尼については、この四年前の史料が残っている。建久元年（一一九〇）、頼朝が十月に後白河上皇、後鳥羽天皇への拝謁のために京へと出発する以前の四月十九日、紀伊国湯橋の地頭領主「熊野尼公」に対して消息を送り、「造大神宮役夫工米」の未済を止めるよう「下知」しているのである。⁽¹⁹⁾ おそらく伊勢大神宮役夫工米を未進した「熊野尼公」は、四年後に登場する「熊野鳥居禪尼」と同一人物であつたと考えることができる。

頼朝が熊野鳥居禪尼に地頭職を与えたのは、自らの叔母であつたという尊敬の念も相俟つてのことであろう。

親族以外の御家人の娘にも頼朝は地頭職を与えている。頼朝の父義家の家人鎌田正清は、保元の乱以来義朝に仕えて功を挙げた家人で、永暦元年（一一六〇）妻の父長田莊司忠致の奸計によつて義朝が殺され、政清も同じ時に長田の子によつて殺され、政清の妻（長田忠致の娘）はこのことを悲しんで自害したという。政清の遺児の男子二人は、一ノ谷で戦死した長男と源義経の四天王といわれたが屋島で戦死した二男

の二人であつたが、この時点（一九四年）で二人共に亡くなつていた。幸いにもたまたま女子がいて、建久五年（一九四）の勝長寿院の如法經供養の際、頼朝・政子の元に参上したので、その女子に「尾張国志濃幾（篠木）、丹波国田名部両荘」の地頭職を恩補したのである。⁽²⁰⁾

この事実から、頼朝は、功臣の娘なら、女性が地頭職を与えられ、親から相伝することを、承認していたことがわかる。熊野鳥居禪尼が地頭に補任されたのは、頼朝の叔母であるからという一族中の尊属厚遇の念ばかりでなく、女性が地頭職を拝領したり相続したりすることに異論は持たなかったからであると考ええる。

頼朝死後の北条政子時代に、これらの問題はどのように考えられたのであろうか。章を改めて考えてみよう。

三 尼御台と熊野鳥居禪尼

正治元年（一九七）一月、源頼朝が亡くなった。すると頼朝の跡を継いだ頼家は「問注所」を「廊外」（幕府の外に新造したり、頼朝時代とは異なつた側近政治を行つたため、四月、頼家の「親裁」は停止され、代わつて十三人の重臣の合議制が敷かれるという事態を迎える。親裁を停止したのは実母政子であつた。⁽²¹⁾これ以後政子は「尼御台所」

「三品」「禪定三品」「二位家」「三品」「禪定二位家」などと呼ばれ、將軍家と鎌倉幕府の後見役を務め、実朝死後は「將軍家」そのものとして、生涯御家人社会を見守り、その揺るぎない確立のため努力を続けることになる。政子の死後の呼称も「二品」「二位家」「故二品」

「故二位家」であることがそれを物語っている。

承元四年（一二〇）九月、熊野鳥居禪尼知行の地頭職は、「養子」に「讓補」することが幕府で決定されている。その理由は「將軍家御避狀」があるので、疑問の余地はないと「仰せ出された」からであると『吾妻鏡』は記している。⁽²²⁾大江広元が奉行をつとめたこの案件について、頼朝の避狀があるから疑問の余地はないと「仰せ出された」のは、政子であつたと考えられる。このころは將軍は実朝であり、北条義時の執権政治が始まつていたが、將軍頼朝の避狀の存在を一番よく知つていたのは、政子以外にはないからである。

それから十二年の後、承久の乱の翌年、貞応元年（一二三）四月、鳥居禪尼の所領である紀伊国佐野莊地頭職は、尼一期の後、子息長詮法橋が相伝すべき旨の裁許が下つている。この禪尼は「六条廷尉禪門（源為義）妹」で、「故右大將家（源頼朝）姨母也」と記されている。鳥居禪尼の長男が行忠、二男が長詮であるという。⁽²³⁾この時の裁許では、兄の行忠は「母の命」に背き、当莊を押領した上に、去年の承久の乱では院側に加わつて合戦し、乱後零落したが、この莊園に立ち帰つた、と弟長詮は訴えている。一方、長詮は「関東（幕府）御祈祷」の忠に抽んじていたとの判断により、このような決定が為されたのである。幕府方に付いていたことが評価されて、長詮の相伝が幕府に承認されたことがわかる。

ここで問題なのは、鳥居禪尼が頼朝の姨母であつて、為義の妹であるとされている点である。頼朝の姨母なら義朝の姉妹でなければならないので、一九四年の頼朝生存中に但馬国多々良岐莊の地頭に補任

された「熊野鳥居禪尼」とは別人であるようにも考えられるが、2つの史料の共通点は「故左典厩姉君」（頼朝の父義朝の姉）と、「故右大将姨母」（頼朝のおば）であり、鳥居禪尼が頼朝の姨（おば）であつた点である。従つて頼朝生存中に但馬国多々良岐荘を安堵された鳥居禪尼は、頼朝死後の、政子が「二位家」として執政していた承久の乱後の貞応元年（一二三二年）、多々良岐荘や佐野荘など「数ヶ所地頭職」の知行が認められ、それを子息中の弟に相伝させることが將軍家によつて承認されたことがわかる。この相伝を認めたのは、「長詮」が相伝すべきであると「仰せられた」人物、すなわち「二位家」政子であつたと考える。

なおこの鳥居禪尼は紀伊国「湯橋」荘の地頭職も自身の所領として持つていたようである。この荘園に課された伊勢大神宮役夫工米を禪尼が「未済」したため、將軍家は「消息」を以て貢納するよう「下知」したとあるので、上京して「右近衛大将」に任じられる以前の頼朝が、「消息」を下して貢納を命じたのであろう。

四 「御台所」・「二位家」政子の執政と熊野詣

1 源頼朝の正室時代

北条時政の娘政子が生まれたのは保元元年（一一五七）であり、婚姻は治承四年（一一八〇）で、嘉祿元年（一二二五）に亡くなっている。源頼朝は久安三年（一一四七）生まれであるので、十歳年長の頼朝と婚姻し

たことになる。頼朝が征夷大將軍に任じられて鎌倉幕府を草創して以来、「御台所」と呼ばれて御家人から慕われた。

頼朝は平氏が滅亡する壇ノ浦合戦の直前すなわち文治元年（一一八五）三月七日、東大寺造営料として米一万石・砂金千両・上絹千疋などの財を寄進している。⁽²⁵⁾平氏に焼き討ちされた東大寺は、重源の勧進によつて再建の最終段階を迎えていたこの時の寄進は、同年八月二十八日の大仏開眼供養を大きく後押しすることになったと思われる。

この文治元年は源頼朝にとって特筆すべき年となる。つまり十一月二十九日、頼朝は「日本国惣追捕使・同惣地頭」に任じられたので、「兵糧米の徴収」と「国地頭の設置」が朝廷から許可されたのである。そのため頼朝が東国の御家人を「守護・地頭」に任命する権限が、初めて頼朝の手に入ったことになる。

頼朝はその後、文治五年に弟義経と、彼を一旦は匿つた藤原泰衡の冥福を祈り、鎌倉に永福寺の建立を始めている。⁽²⁶⁾内乱期に亡くなった人々を悼む頼朝の気持の表れであらう。

建久元年（一一九〇）頼朝は京に入り、天皇から権大納言・右近衛大將に任じられるが、一ヵ月も経たないうちにこれを辞任して鎌倉に帰った。二年後の建久三年七月、頼朝は征夷大將軍に任じられると、すぐに將軍家政所を設置し、東国政權として堅実な歩みを始めるのである。

頼朝は重源などの勧進活動に対して援助を続ける姿勢を崩さず、文治四年には備前と播磨を東大寺と東寺の造営料所とし、重源と文覚に国務を執らせることを朝廷に奏請し、実現させた。⁽²⁷⁾このように頼朝は

重源の勸進活動を支援してきたので、建久六年（一九五）三月十二日の東大寺再建供養会に結縁するため、政子、大姫、頼家らを伴い、畠山、和田、梶原、千葉、小山、北条、平賀などの「数万騎」の御家人を「随兵」として従えて、二月四日鎌倉を出発し、東大寺供養会に臨んだのであった。⁽²⁸⁾

御台所政子にとっては初めての京上であり、三月七日には石清水八幡宮や左女牛若宮に頼朝・頼家と参った後、十日供奉の御家人を従えて石清水から南都に下向し、十二日の東大寺供養に臨み、そのあと、三月二十九日には頼朝が宣陽門院（勳子内親王・後白河天皇と丹後局高階栄子の間の娘とその母丹後局を六波羅亭に招いたとき、政子や大姫も対面している。政子・大姫などは、丹後局とは四月にも六波羅亭で会い、交誼を深めている。

五月十日、京の頼朝宿舎（六波羅亭であろう）に「熊野別当」がやってきて、「若公」（若君頼家）に「甲」を献上したところ、頼朝は別当と対面し、「殊にお喜びになった」と『吾妻鏡』には記されている。⁽²⁹⁾

多くの御家人を従え、東大寺に馬一千疋、米一万石、黄金一千両、上絹一千疋を寄進するため、さらに多くの御家人やその郎党を動員して運搬させた、頼朝一家のこの東大寺供養への結縁は、二年半前に征夷大將軍に任じられ、関東に幕府を開いた頼朝の示威行進でもあったのであろう。

頼朝一家はこの年二月四日に鎌倉を出発し、三月四日に六波羅亭に入り、石清水八幡宮などに参ったあと、十日に南都に到着、そのとき御家人たちの大行列が南都の人々を驚かせたことと思われる。十三日

に頼朝は大仏殿に参ったあと、十四日には京都に帰っている。それから三ヶ月と十日、頼朝一家は京に滞在して、丹後局や宣陽門院、九条兼実らと会って政治的折衝を行い、また頼朝は頼家を伴って参内し、あるいは単独で天王寺に参拝し、政子や大姫などの子供達は清水寺など京都の「霊地巡礼」に明け暮れている。鎌倉に帰り着いたのは、七月八日である。なんと頼朝一家の上京の旅は五ヶ月に及んだことがわかる。

その長い旅の間の五月十日、熊野別当がやってきて頼朝に対面し、頼家に「甲」を献上したのであるから、政治的な意図があつての対面とは異なるこの訪問を、頼朝が殊に喜んだのも道理であろう。まして、前節で述べたように、頼朝がそのおばにあたる熊野鳥居禅尼の望みを叶えるかたちで但馬国多々良岐荘の地頭職を与えたのは、この前年の建久五年閏八月と九月のことであつた。熊野鳥居禅尼はこの地の初めての地頭として、頼朝の下文を得たことも前述した。気苦労の続く京での日々の中で、熊野別当との対面は、頼朝にとって特に心の安らぐ一時であつたと思われる。

頼朝の上京の旅は、その後の幕府や將軍家の在り方にさまざまな新しい側面を付与することになる。その一つは、東国以外の地、中でも関東から遙か離れた九州諸国から、「大田文」を作成し幕府に提出させたこと（建久八年）、保元以来の諸国「叛亡者」の冥福を祈るため、諸国に命じて造立させた八万四千基の塔を供養したことである（同年十月）。⁽³⁰⁾ このうち後者の行為は、源氏一族だけでなく、平氏やその他の保元・平治の乱とそれ以後の合戦で命を落とした人々への、頼朝の

鎮魂の思いが篤かったことを示している。

鎌倉幕府を開き、多くの御家人を統率しつつ幕府機構を整備し始めたこの頼朝が、正治元年（一一九九）一月十三日亡くなった。続いて次女乙姫も六月に亡くなった。二年前には大姫や、京では一条能保も亡くなっていた。前年京では後鳥羽上皇が皇子に譲位し、土御門天皇の時代となり、後鳥羽上皇は初めて熊野御幸に出発している。幕府と將軍家の初めての危機と後鳥羽院政の始まりは、一一九八年・九九年に訪れていたのである。

2 頼家時代の政子と北条氏

関東では、正治元年（一一九九）一月の頼朝の死を受けて、嫡男頼家が十八歳で將軍家を継承したが、頼家の執政には、頼朝時代に確立されたつあった慣例を否定する事象が多々あったので、早くも四月には頼家の訴訟「親裁」が停止されるという危機的状況が現出する。頼家の親裁を停止させるといふ思い切った政局の転換は、実母で御家人からの信望厚い政子以外には為し得なかったと考える。政子は頼家の「親裁」にかわり、頼朝と内乱期に行動を共にした十三人の御家人たちによる「合議」制の政治を対置するという、極めて妥当な措置を採っている。⁽³¹⁾ 見事な政治力といえよう。

頼家が二代將軍として執政したのは一二〇二年七月から一二〇三年八月のわずか一年間であり、正治二年（一二〇〇）十二月、頼家は治承以後の御家人への新恩地人毎に五〇〇町超過分の没収を図って、三善康信に諫止されるなど、頼朝の施策や御家人社会の通念と相反する態

度を取ったため、政子や重臣たちとの溝は次第に大きくなり、建仁三年（一二〇三）八月二十七日、惣守護職と関東二十八国の地頭職を子一幡に、関西三十八国の地頭職を弟千幡（実朝）に譲らざるを得なくなった。その五日後には比企一族と一幡は、北条時政・政子によって亡ぼされてしまう（比企の乱⁽³³⁾）。

將軍頼家の執政が制限された代わりに、東国政権を支える中心に座り始めたのは北条時政とその子義時である。義時は他の重臣たちに比べ若輩ではあるが（三十七歳）、十三人の重臣の合議制の中に入っている。また義時の子泰時は建仁元年（一二〇一）十九歳の時、伊豆国に赴き損亡・大風などによる出挙米を免除して、飢えた民に米を支給する「賑給⁽³⁴⁾」を行っている。このように、政子の生家である北条家が「尼御台所」政子を支える状況をつくっていた。

政子は頼家時代、頼家を訓戒したり、將軍の座から降ろしたりと、無情な母親のように見えるが、政子にとっては、頼朝亡き後、どのように鎌倉幕府を存続させるかが、最も大きな命題だったと思う。後見役として頼家を訓戒したり、内乱を未然に防いだりはしてみたが、頼家の政治姿勢が余りにも未熟であったため、我が子を見限っても、幕府と御家人社会を守ろうとしたのであろう。政子は頼朝の亡くなった正治元年の翌年、鎌倉亀谷の地を明庵栄西に寄付し、寿福寺造営を始めているので、頼朝の菩提を弔う事業の遂行を、もう一つの自身の役割と考えていたことがわかる。まさに「尼御台所」として生きることで、幕府の存続と同時に、政子の考えるこの時期の役割であったといえる。⁽³⁵⁾

3 実朝時代の政子と北条氏

建仁三年(一一〇一)、頼家が子一幡と弟千幡(実朝)に地頭職を譲って引退したこと、続く比企氏の乱で、比企一族と一幡が滅ぼされたことによって、十二歳の実朝が征夷大將軍に任じられ、二年後には北条時政が引退し、義時が執権となって(四十三歳)、幕府の統治機構は再び安定することになった。

実朝將軍期(一一〇三年から一二一九年までの十七年間)には、幕府はいくつかの重要施策を実施している。先ず建永元年(一二〇六)、幕府は、大罪を犯さぬ限り、源頼朝の恩賞地を没収しないという決定を下した⁽³⁶⁾。頼朝時代以来の御家人の知行地を安堵したということは、一方で、頼朝以後の將軍家の恣意を否定したことになる。この決定が可能であったのは、年若い將軍よりも頼朝御台所政子への信頼の方が遙かに厚く、それ故政子生存中はこの決定が守られるはずだという信念が、御家人社会に溢れていたからであると思う。

同年熊野本宮が焼亡し、三年後に再び炎上していることは、政子の脳裏に熊野大社に対する信仰の念と源家一族と家族追善の念をかき立てたと思われる。

幕府はまた承元元年(一二〇七)、武蔵守北条時房に、武蔵国の荒野の開発を命じ、和泉・紀伊両国の守護職を止め、院の熊野詣の駅家雑事を勤仕させることを命じている。⁽³⁸⁾ 前者は御家人による荒野の開発促進策であり、將軍頼家時代の初期、重臣合議制出發時に出された幕府の荒野開発令を踏襲する施策であり、後者は、後鳥羽院の熊野詣によ

る沿道庶民の負担増に配慮した施策である。いずれも東国という未開墾地の振興を地頭御家人によって担わせると共に、大きな負担を強いている院の熊野詣のしわ寄せを受けている沿道庶民に対する負担軽減という脈絡策であったといえよう。

これらの施策を実施に移した後、政子は承元二年(一二〇八)十月十日、最初の熊野詣に出發した。この熊野詣は「尼御台所為果御宿願御参熊野山」と『吾妻鏡』にあるので、予てより政子が参りたいと切望していた熊野参詣であったことがわかる。十日の「卯尅」に出發し、「武蔵守」(北条時房・三十四歳・政子の弟)のみを従えた小規模な参詣であった。⁽⁴⁰⁾ 政子の熊野参詣の詳細は『吾妻鏡』に記載されていないので不明であるが、「二十七日御入洛」の注記があるので、京都から熊野を目指す巡礼の旅であったのであろう。恐らくは、頼朝・頼家・大姫・乙姫の四人の家族を失い、保元の乱以来、敵味方に拘わらず多くの武士を失わざるを得なかった罪の意識が、政子の脳裏に焼き付いていたからであろう。

政子の一回目の熊野詣から一年経たないうちに、熊野本宮はまた炎上している(承元三年九月十三日)。⁽⁴¹⁾

これ以後、幕府は熊野参詣道だけではなく、諸国の旅人の愁いを無くす方策を施策の中で展開し始める。承元四年(一二一〇)、幕府は駿河国以西の駅家の結番・夜警と旅人の警護を守護に命じ、翌年には「東海道」の新駅設置を、重ねて守護・地頭に命じている。⁽⁴²⁾ その翌年(一二一一)には御家人の京都大番役の励行を諸国守護に命じ、「津料・河手」の禁を解き、これを再び地頭得分とした。⁽⁴⁴⁾ つまり地頭御家人の

収入を増やす代わりに、大番役や駅家での警護負担を増大したのである。そして同年、関東分国に奉行人を派遣して、その国で庶民の訴えを処理させることを制度化している。⁽⁴⁵⁾幕府は庶民にも様々な配慮をなす姿勢を崩していないことがわかる。

東国の庶民の生活への目配りはその後も続き、建保三年(一二二五)二月、幕府は諸国関渡地頭に船賃用途を徴収するかわりに料田を立て、旅人への煩いをやめることを命じ、七月、鎌倉の諸商売人の員数を定めることを命じている。⁽⁴⁶⁾

このように頼家将軍期の初めの十三年間は、將軍生母「尼御台所政子」と執権北条義時が主導する安定期が現出され、東国の地頭得分を増す代わりに、地頭には東国の開発や京都大番役の着実な勤仕、また駅家での結番・夜警など流通路の警護を課すなど、領主としての新たな自覚と負担を担わせていたのである。流通路の整備・安全の確保にまで幕府の施策が拡大した背景には、政子と時房の熊野への祈りの旅での見聞があったように思える。

建保五年(一二二七)、頼家の子公暁は政子の計らいによつて鶴岡八幡宮別当とされた。⁽⁴⁷⁾この処置も、身近な夫や子供の殆どを失った政子の、寂しさつまりこれ以上親族を失いたくないという思いから出たものと思う。

翌年(一二二八)二月、政子は熊野参詣を行う。このたびも、扈從したのは武蔵守北条時頼であつた。参詣の理由について『吾妻鏡』は「是為熊野山御斗敷也」と述べている。⁽⁴⁸⁾斗敷とは「頭陀」の漢訳語で、衣食住に対する食欲を払いのける修行をいう。政子は俗世間の食欲を

払いのけることを目指していたから、延暦寺に入り葛川明王院で修行していた頼家息公暁を、なんとか源家の一員に戻してやりたいとの思いから、鎌倉に呼び戻したのであろう。その政子の願いが聞き入れられたこの段階で、政子は二度目の熊野詣を行ったのである。公暁の鶴岡八幡宮別当職就任は、政子が純粹に源家一族の存続を願ったことによる処置であつたと感じる。

政子の鎌倉出発の直前の正月二十一日、京都から使者が来て、將軍実朝は「権大納言」に任じられたことが告げられた。それを受けて、政子・時房は、稲毛重成の孫娘(綾小路師季の娘・十六歳を伴つて、二月四日に鎌倉を出発した。この孫娘は土御門通行に嫁すことになっていたのである。一行は二十一日に「入洛」している。

尼御台所政子(このころ禅讓三品とも呼ばれている)が後見し、実朝を將軍家に頂く鎌倉幕府の、東国開発政策、流通路整備・警護政策によつて、また実朝の朝廷・上皇との親しい関係によつて、一二一八年年末までは、鎌倉幕府と公家政権とは極めて緊密な連携が保たれていた。朝廷は政子に対して、十月に「從二位」を与えている。⁽⁴⁹⁾そうした状態に甘えが生じたのか、頼家は自ら朝廷に対して二月に「大將」を「所望」し、三月には「左近大將」に任じられ、十二月には「右大臣」に任じられている。⁽⁵⁰⁾「右大臣」拝賀のため、頼家は明年正月に鶴岡宮に参拝することになり、その時の「御装束御車已下調度等」は上皇から拝領することとなり、これらの品は年末の二十一日、鎌倉に到着している。⁽⁵¹⁾

明けて承久元年(一二二九)正月二十七日、実朝は「右大臣」として

上皇から送られた装束を纏って鶴岡宮に参拝したとき、公暁に殺害されたのであった。⁽⁵²⁾時に実朝二十八歳、公暁は二十歳、政子は六十二歳であった。鎌倉幕府にとって、頼朝、頼家、実朝三代の將軍を失うという、最大の危機が発生したのである。

4 「二位家」政子の執政

將軍の弑逆という鎌倉幕府最大の危機に素早く対処したのは、「尼御台所」「二位家」政子であった。実朝暗殺から一カ月あまり後、政子は後鳥羽上皇に使者を送り、皇子を將軍とすることを奏請した。⁽⁵³⁾しかし上皇の返答は、上皇の「舞女」亀菊の所領である摂津国長江・倉橋両荘の地頭職を改補せよというものであり、双方の言い分はすれ違っていた。そのため幕府は政子の使者として北条時房（この年四十五歳）に千騎を率いて上洛させた。⁽⁵⁴⁾双方一触即発の状態になったのである。このたびは朝廷側の譲歩で、九条道家の子三寅（二歳・後の藤原頼経）を鎌倉に下向させることで決着がはかれた。しかし上皇の対決姿勢は収まらず、「大内（内裏守護）源頼茂が上皇方に討たれている。⁽⁵⁵⁾三寅を迎えた鎌倉幕府は「政所始」を行い、政子が執政し、北条義時に奉行させるという新しい政治体制を確立する。⁽⁵⁶⁾義時は五十七歳であった。こうして「二位家」政子の政所が設置され、政子の執政が本格的に始まったのである。

新しい二位家政子の政治が始まった承久元年の翌二年、公暁とは別の頼家の遺児禪暁が京都で殺された。⁽⁵⁸⁾こうして源家の男系は皆いなくなつたのである。

翌承久三年（一二二一）五月、後鳥羽上皇は兵を集め、源家の外戚である西園寺公経父子を幽閉し、京都守護伊賀光季を討つて、北条義時追討宣旨を「五畿七道」に下した。「関東分宣旨」を受け取った幕府は、「二品亭」（政子の邸宅）でこれを披いた。その直後、北条時房、泰時、大江広元、足利義氏以下の御家人が参集する前で、政子は簾の内側から、秋田景盛に伝えさせて「皆心を一にして奉く（承る）べし、是最期の詞也」という有名な演説を行う。⁽⁵⁹⁾

政子はこの演説の中で、右大將源頼朝の御家人に対する御恩の大きかったことのみを諄々と説き、このたびの論旨を逆臣の讒言を採用した「非義の論旨」と呼んでいることが注目される。その根拠は、亀菊の申状に基づいて後鳥羽上皇が長江・倉橋両荘の地頭職を停止せよと二度も宣旨を下したところ、「右京兆」（北条義時）は納得せず、「幕下將軍時（頼朝將軍時）、募勲功賞定補之輩、無指雜怠而難改」由を申したので、後鳥羽の逆鱗に触れたからであると『吾妻鏡』は述べている。つまり二位家政子と執権義時をトップとする幕府は、地頭職に御家人を補任しあるいは改補する権限は、頼朝が獲得した権限であることを最大の論拠として、朝廷方と対峙したことがわかる。

参集した御家人たちに対して政子はどうも述べている。「名を惜しむの族は早く秀康・胤義等を討ち取り、三代將軍の遺跡を全うすべし」「但し院中に参らんと欲する者は、只今申切るべし」と。つまり政子は参集する御家人たちに、頼朝以来の御恩、特に地頭職を誰から拝領したのかを思い起こさせ、さらに、それを否定してでも院方に加わりたい御家人は、その場で表明する自由まで保障したのである。政

子のこの演説を聴いた御家人たちは、涙にくれ、返答すらできず、命を軽んじて恩に報いようと思うばかりであったという。『吾妻鏡』はこの状況を、「国の危」を見誤らない「忠臣」とはこのことをいうのであろうと評している。忠臣とは、まさに政子とその言葉に従った関東御家人たちをいうと考える。

夕暮れになって、義時邸に時頼、泰時、大江広元、三浦義村、安達景盛らが集まり評議を凝らしたが、意見が区々で纏まらなかった。つまり足柄・箱根両関を固める案、先んじて軍を上京させる案などが出て、一つに決定することができなかったためである。重臣合議制では決定できなかったため、義時はこの「両議」を以て「二品」（政子）に申し上げると、政子は「上洛しなければ官軍を破ることはできないだろう、安保実光以下の武蔵勢を待つて、速やかに参洛すべきである」と述べたので、幕府方は上洛案に決している。

政子の決定に従い、遠江、駿河以下幕府管轄下の諸国に義時の「奉書」が急送され、各家長に対して一族を率いて参集するよう命が下った。承久の乱に参集した幕府軍は十九万騎であった。⁶⁰政子の演説や決断が、頼朝以来の御恩を再認識した御家人たちの心を大きく揺り動かしたことがよくわかる。御家人たちが東国で見た光景は、頼朝亡き後暴走しかけた頼家を訓戒し、関東が危機に瀕した際には、重要事項の決定にあたって重臣合議制を復活させて諸事を決定する方策を定着させ、以後頼家、実朝を後見しつつ、執権を将軍政治の補佐に置き、自らは頼朝を初めとする源家一族・親族や、内乱期に命を落とした多くの武士たちの鎮魂の祈りを、もう一つの使命としてきた「尼御台所」

であった。政子はいつまでも初代鎌倉将軍家の御台所であり、承久の変勃発直前には建保六年（一二二八）に朝廷から従二位に任じられていたから、翌年二歳の三寅が鎌倉に到着したとき、政所設置権を持つ「二位家」政子が政務を執行したのは、当然の権利行使であったのである。政子の演説が御家人たちの心を結束させ、内乱を早期に決着させたのは、政子が鎌倉幕府を終始庇護し、将軍を後見し、危機発生時には重臣合議制を何度も復活させ、平常時は執権や大江広元などの指導に任せる態勢を築き上げてきたからであろう。この「尼御台所」の姿を、御家人たちは尊敬の念をもつて見守り続けてきたことがわかる。

またこの段階の政子は軍事の決定まで行っていることが注目される。この前史は、頼家将軍期末期の一二〇三年、比企氏の乱で比企一族と一幡を滅ぼすため追討軍を派遣したのは、「御台所の仰せによって」とあるように政子であった。⁶¹つまり「尼御台所」政子は軍勢を派遣する権限を握っていたのである。また実朝将軍期の一二〇五年、頼朝の重臣であった畠山重忠の乱に際し、乱後の論功行賞は「尼御台所の御計らい」とあるように、政子が乱後処理を行ったことが『吾妻鏡』に見える。⁶²東国の御家人社会で、政子は故將軍頼朝の権限を、「尼御台所」として、一部分引き継いでいたからであると考ええる。つまり政子は頼朝亡き後源家二代・三代将軍を後見する傍ら、初代「將軍」の「御台所」として、頼朝の菩提を弔う役割のほかに、重大事件勃発時に軍事指揮権・乱後の論功行賞権を発動してきた歴史があったからであると思う。こうした東国御家人社会内部での軍事指揮権・乱後処理権限の発揮の歴史が、承久の乱発生時の政子の演説や、幕府の的確・

迅速な軍事行動を生み出す根拠になったと考える。

承久の乱の乱後処理として、承久の乱で東海・東山・北陸三軍の幕府軍が京上した五月二十二日から一ヶ月も経たない六月十五日、上皇が北条義時追討官旨の撤回を決定、京方公卿や院北面たちを処断したので、幕府は後鳥羽上皇、順徳上皇を隠岐と佐渡に流し、次いで土御門上皇を土佐国に流した。⁽⁶³⁾

幕府にとって乱の首謀者の処罰に並んで重要だったのは、京方に組した公卿や武士の所領を没収できたことである。承久三年八月、土御門上皇を流罪にする前に、幕府は関東方に味方した伊勢神宮など諸社に神領を寄進し、京方公卿・武士の所領を恩賞に宛てた。この所領は泰時が書き上げたところ三千余箇所あった。その没収地を「勇敢勲功之浅深に従い面々に省き充」てたのは、またこのたびも「二品禅尼」政子である。⁽⁶⁴⁾つまり没収地の功臣への配分は、政子が指示し、執行事務を「右京兆」義時が行ったのである。この『吾妻鏡』の記述からも、乱後処理の最高決定権は、「二位尼」政子が握っていたことがわかる。

5 承久の変後の政子とその死

承久の変の翌貞応元年（一二三二）、幕府は乱後に補任された守護・地頭を対象に、その所務を定め、非法を禁じ、また六波羅に守護・地頭の濫妨を究明する代官を派遣し、新補地頭・守護の非法防止に努めている。⁽⁶⁵⁾政子からも、畿内・西国の在庁に対し、承久の乱後に新補した守護・地頭の非違を注進させるよう指示が出され、義時がそれに基づいて「御書」を下している。このような新補地頭などの「非違」を

注進させる指令を政子が出したのは「民庶の憂喜を知るため」であったと『吾妻鏡』は述べている。⁽⁶⁶⁾政子の眼差しは御家人ばかりでなく、頼家・実朝將軍期同様、常に庶民の方にも向けられていたことがわかる。

元仁元年（一二三四年）六月二十八日、北条政子は六歳の三寅の後見として北条泰時（四十二歳）と時房（五十歳）を選んだ。⁽⁶⁷⁾自らは政治の一線から退く決意から出た処置であつたのであろう。後の「執権・連署」の端緒である。これは直前の十三日、北条義時が亡くなったためである。⁽⁶⁸⁾そして自らの最後の処断として、閏七月、政子は伊賀氏の謀叛を鎮め、藤原実雅を京へ送り返した。これを機に幕府は伊賀光宗の所領を没収し、光宗を初めとする首謀者を配流している。⁽⁶⁹⁾

翌嘉祿元年（一二三五年）七月十一日政子が没した。六十九歳であつた。その知らせを聞き、悲しんで自ら出家する男女が多かったという。二階堂行盛が真つ先に「素懷」を遂げ（出家し）た。⁽⁷⁰⁾行盛はこの年政所執事であり、翌年評定衆になり、のち『御成敗式目』制定にも参画した御家人である。政子の描く幕府の将来像の実現に貢献した人物の一人であつたと思う。

『吾妻鏡』は政子について亡くなった日に次のように記述している。「前漢の呂后に同じく、天下を執行せしめ給う、若しくは又神功皇后再生せしめ、我國の皇基を擁護せしめ給うか云々」と。天下の政治を執つたことを評価した点は、天下を「鎌倉幕府と將軍家の政治と仏事」と言い換えれば、政子の婚姻以後の評価として当たっていると思う。政子の葬送と仏事は頼家の娘「竹御所」（母は木曾義仲の娘・この

五年後に三寅すなわち將軍頼經の御台所になっている⁽⁷⁶⁾によって「定豪」を導師として行われ、「二位家」の百箇日仏事は北条泰時によって執行⁽⁷⁷⁾行われた。

おわりに

北条政子は源頼朝の生存中は「御台所」として、頼朝死後は「尼御台所」として、東国御家人社会の御家人・庶民を、頼朝時代に準拠しつつ、守り続けてきたことを論証した。その傍ら頼朝を初めとして源家の親族・先祖の供養ばかりでなく、保元・平治の乱以来の合戦で亡くなった多くの武士の菩提を弔い亡魂を鎮める作業も、寿福寺の造営や熊野詣として行ってきたことを論じた。このように政子が、頼朝の築いた大きな権限の中の少なからぬ部分を継承できた理由・背景は、どのような事実の中にあつたのかを述べて、本稿を締めくくりたいと思う。

政子と頼朝の婚姻は、頼朝が「流人」として伊豆蛭ヶ小島に流されていたとき、政子が「暗夜に迷い」「深雨を凌ぎ」頼朝のもとに通つた⁽⁷⁸⁾ことに始まると考える。治承元年（一一七七）大姫が誕生したことにより、北条時政はようやく政子の頼朝との婚姻を承認したのである。このように、政子は父の反対を押し切って積極的に自らの意志で夫頼朝を選んだのである。この事実が後々まで夫婦の対等性を保証したと考える。

養和元年（一一八一）政子は病の床に就いた。実はこれは第二子を身

ごもつたためであつたが、予め真相が知られない時代だったため、御家人たちは続々と政子の不例を心配して、頼朝・政子の宿舎に集まつてきた。翌寿永元年、政子は長男頼家を生んだ。八月十二日のことであつた。お産の直前「在国の御家人等、近日多く以て参上」とあるように、また御家人たちが鎌倉に集まり、出産後には、御家人たちは「代々の佳例」に従つて護刀を進上している⁽⁷⁹⁾。このように頼朝嫡男の誕生を御家人たちは心配と喜びの両方の感情を抱きつつ、我がことのように見守っていたことがわかる。政子に対する敬愛の情は頼家出産時以来御家人の心に深く刻み込まれていたのである。

この政子の妊娠中、頼朝は「亀ノ前」を伏見広綱宅に匿い、寵愛するという事件が持ち上がっていた。『吾妻鏡』はこれを「御密通」と表現している。政子を正室としている以上、頼朝の行為は「密通」としか写らなかつたのは当然であろう。

翌年政子は牧宗親に命じて「亀ノ前」を匿っていた伏見広綱宅を「破却」させる。この行為に対して頼朝は怒り、牧宗親の誓⁽⁸⁰⁾を切っている⁽⁸¹⁾。頼朝は宗親に恥辱を与えたことになる。この時の頼朝の言は「御台所を重んじるのは神妙なことだが、このようなことは、どうして自分（頼朝）に知らせなかつたのか」というものであつた。つまり、頼朝は御家人は自分同様、政子をも主君として重んじるべきであると思つていたことがわかる。

この事件を知つた牧一族や「牧の方」の夫北条時政は、反発して伊豆へ引き上げてしまった。これは牧一族と北条時政が頼朝との主従関係を拒否する行為である。慌てた頼朝は、伏見広綱を遠江国に流罪に

処している。⁽⁷⁵⁾直前の頼朝の命令とは反対に、断罪に踏み切ったことになる。このようないわば頼朝の「朝令暮改」が生じたのは、「御台所の御憤り」によって頼朝の態度が変わったためだと、『吾妻鏡』には記される。

元暦元年(一一八四)、頼朝は大姫(八歳)の許嫁志水義高(十三歳・木曾義仲の子息・父の敗死により鎌倉に連れてこられていた)を、堀親家らに命じて密かに殺させた。大姫は悲しみのあまり水分の摂取を断ち、この行為で抗議の意を示した。これに対して頼朝はのち、義高を殺害した堀親家の郎従を「晒首」という極刑に処している。またもや頼朝の朝令暮改が発生した背景には、「御台所の御憤」があつたという。⁽⁷⁶⁾政子はこのとき「志水義高の誅罰により、大姫は病を得た、それはひとえにこの男堀親家の郎従の不義から起こっている、たとえ頼朝から殺せという仰せを被っていたとしても、どうして内々に姫君方へ子細を申し上げないのか」と憤ったという。この政子の言葉は前年の頼朝の牧宗近への断罪の言葉そのままであることは明白である。政子の憤りの言を受けて、頼朝は「返す言葉なく」、堀親家の郎従を晒首に処したのであつた。

これら二つの事件は、御家人との主従関係を構築している主君は、頼朝だけではなく頼朝・政子の夫婦であつたことを示している。政子が生涯頼朝の「御台所」「尼御台」として尊敬され執政できたのは、「鎌倉殿」と御家人の間に主従関係が形成されていたからである。その「鎌倉殿」とは頼朝単身ではなく、正室政子やその子供たちを含んでおり、中でも創業時苦勞を共にした政子は、頼朝の次位に座る畏敬

対象であつたと考える。頼朝自身「御家人たちが御台所を重んじるのは神妙」であると述べていることから、政子を尊重する思いを強く持っていたことがわかる。

文治二年(一一八六)四月八日の鶴岡八幡宮での静の舞見物の際、頼朝が静の舞に対して「反逆者義経を慕う歌だ」と不快の念を露にしたのに対し、政子が反論し、静は「貞女」であり、その芸は「幽玄」と言えましよう、と、正反対の評価を下した堂々たる姿を見聞きした御家人たちは、頼朝と政子の夫婦の「家人」であることに、安心感と尊敬の念を持ったとしか思えない。

このように頼朝と政子の夫婦は、婚姻時より対等な関係にあつた。また頼朝自身、政子を重んじることは御家人にとって「神妙」なことだと肯定しており、御家人達の方からは頼朝と政子の夫婦が主君の家「将軍家」を形成していると、夫婦単位の家であることを、幕府成立期から認識していたことが、頼朝の死後、政子が頼家、実朝を後見しつつ、時には軍事指揮権や恩賞給与権などの重事を握り、源家の男系後継者がいなくなつたとき、幕府の最高の危機に際して、自ら執政する姿を歴史に残した理由であると考ええる。

こうした政子の生涯は波乱に富んだものであり、休息の暇もあまりなかつたと云えるが、政子は執政の合間を縫って、寿福寺を造営したり、二度の熊野詣を行ったりした。それは将軍家やその親族の菩提を弔い、保元以後の源平合戦やその後の関東の内戦までを含めて、敵味方に拘わらず、命を落とした多くの武士や庶民の鎮魂の祈りのためであつたと思う。多くの亡くなつた人々の靈魂に尊敬の念を厚くし、

その鎮魂を自らのもう一つの役割としたのが、北条政子であったと考える。政子の死後、関東武士の熊野詣でが盛んになったことは、彼らの参詣の前提に、政子の二度の、沿道庶民や幕府に負担を懸けない、少人数での熊野詣であったように思えてならない。

嘉禄元年(一二二五)七月の政子の死後、八年が経過した天福元年(一二三三)、近年熊野山で日夜法華經を讀誦する隱遁生活を送っていた智定房(下河辺六郎行秀)が、熊野那智浦から補陀落山に渡海した。この行秀は北条泰時の「弓馬の友」であったので、それまでの経緯を認め、泰時に書状を託したのであった。それによると、行秀は頼朝の那須野の狩の時、射手に命じられたが、その箭が大鹿に当たらず逃げるという失態を犯し、鹿は小山朝政が射取ったという。そのため行秀は狩り場て出家を遂げ、逐電して行方も知れなかったが、近年熊野山に居て修行していたというものであった。泰時がこの書状を將軍頼經の御所に持参し披露したので、たまたま伺候していた「男女」は、この書状の内容を聞き知って、「感涙」を流したとされる。⁽²⁸⁾

東国の御家人社会では、智定房の補陀落渡海に至るほどの深刻さはなくとも、政子が行った熊野詣でに共感する土壌は、政子の往生以後、静かに広がったであろう。その理由は政子の大役を勤め上げたその潔さに対して、御家人達は信頼と尊敬の念を厚くしていたからであると思う。

注

- (1) 五来重『熊野詣 三山信仰と文化』淡交新社、一九六七年。
(2) 宮地直一『熊野三山の史的研究』国民信仰研究所、一九五四年。

(3) 児玉洋一『熊野三山経済史』有斐閣、一九五四年。

(4) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、一九八二年。

(5) 小山靖憲『熊野古道』岩波書店、二〇〇〇年。

(6) 戸田芳実『歴史と古道 歩いて学ぶ中世史』人文書院、一九九二年。

(7) 渡辺保『北条政子』吉川弘文館、一九六一年。

野村育世『北条政子 尼將軍の時代』吉川弘文館、二〇〇〇年。

田端泰子『北条政子 幕府を背負った尼御台』人文書院、二〇〇三年。

関幸彦『北条政子 母が嘆きは浅からぬことに候』ミネルヴァ書房、二〇〇四年。

『北条時政と北条政子「鎌倉」の時代を担った父と娘』山川出版、二〇〇九年。

これらの著書のはか、永原慶二、上横手雅敬、杉橋隆夫など多くの方の研究論文がある。最も新しい研究論文として、田辺旬氏は「北条政子 発給文書に関する一考察」において、政子の意を受けて「仮名奉書」が発給されたことに注目している(『ヒストリア』二七三、大阪歴史学会、二〇一九年)。

(8) 『一遍聖絵』とも呼ばれ、十二巻本は正安元年(一二九九)の成立、十巻本は数多の転写本がある。

(9) 『大日本史料』第三編の一、東京帝国大学、一九二六年。

(10) 『平安遺文』二四九号、東京堂、一九五五年。

(11) 戸田芳実『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年。

(12) 『吾妻鏡』文治元年二月十九日条(新訂増補国史大系『吾妻鏡』吉川弘文館、一九八九年)。以下『吾妻鏡』から引用の注釈は、年月日のみを記すこととする。

(13) 文治二年三月十二日条。

(14) 文治二年六月十一日条。

(15) 文治五年三月十三日条。

(16) 建久五年閏八月十二日条。

(17) 建久五年九月二十三日条。

(18) 清水正健編『莊園志料』上、角川書店、一九六五年。

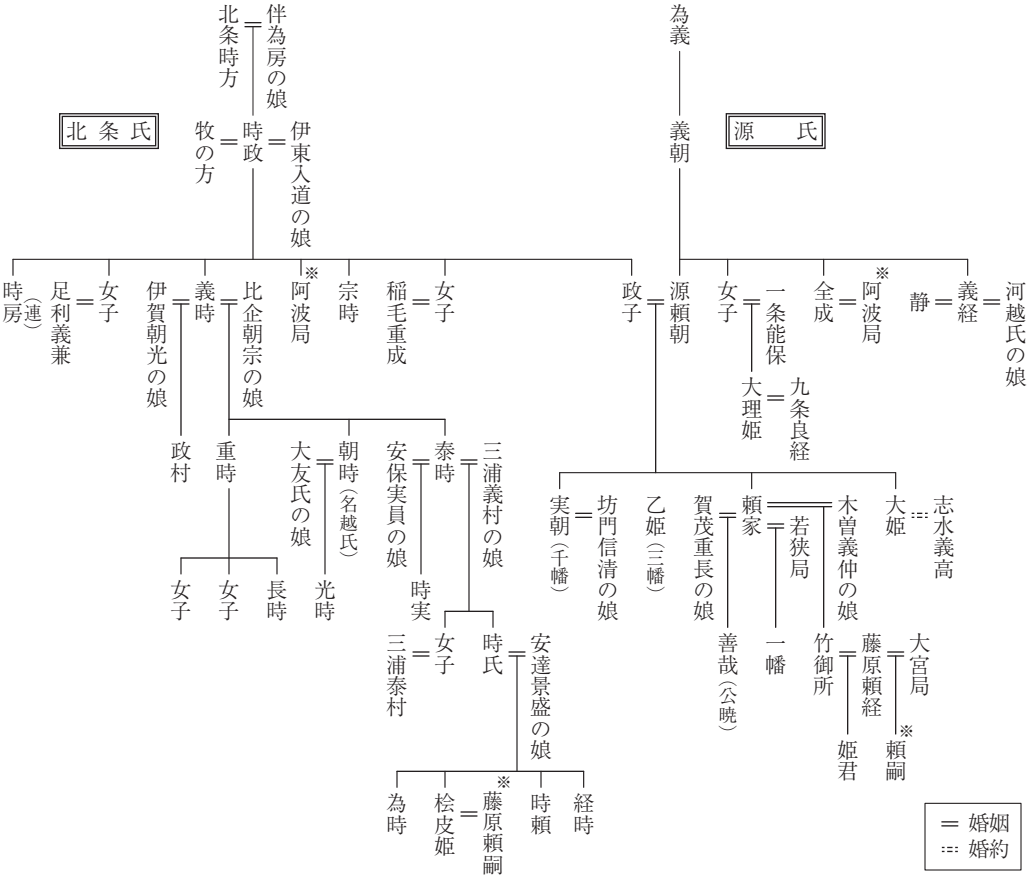
- (19) 建久元年四月十九日条。
 (20) 建久五年十月二十五日条。
 (21) 田端泰子前掲注(7)書。
 (22) 承元四年九月十四日条。
 (23) 貞応元年四月二十七日条。
 (24) 建久元年四月十九日条。
 (25) 文治元年三月七日条。
 (26) 文治五年十二月九日条。
 (27) 『玉葉』名著刊行会、一九八八年。
 (28) 建久六年二月四日、三月四日、十日、十二日条など。
 (29) 建久六年五月十日条。この熊野別当は湛増である。彼は初め平氏と結んでいたが、治承・寿永の内乱では、熊野水軍を率いて源氏方に加わり、屋島・壇ノ浦で大活躍した熊野新宮別当である。また父湛快共々、高野山蓮華浄院領南部荘の下司を務めてもいた。
 (30) 『鎌倉年代記』(『統史料大成』第五十一卷所収、臨川書店、一九七九年)。
 (31) 田端泰子前掲注(7)書。
 (32) 正治二年十二月二十八日条。
 (33) 建仁三年九月二日条。
 (34) 建仁元年十月六日条。
 (35) 正治二年閏二月十三日条。
 (36) 建永元年一月二十七日条。
 (37) 『源家長日記』(『冷泉家時雨亭叢書』第四十三卷所収、朝日新聞社、一九九七年)。
 (38) 承元元年三月二十日条。
 (39) 承元元年六月二十四日条。
 (40) 承元二年十月十日条。
 (41) 「熊野夫須美神社略由緒」(『社寺取調類纂第四冊』所収、教部省、年未詳)。
 (42) 承元四年六月十三日条。

- (43) 建暦元年六月二十六日条。
 (44) 建暦二年二月十九日、九月二十一日条。
 (45) 建暦二年十月二十二日条。
 (46) 建保三年二月十八日、七月十九日条。
 (47) 建保五年六月二十日条。
 (48) 建保六年二月四日条。
 (49) 建保六年十月二十六日条。
 (50) 建保六年二月十日、三月十六日、十二月二十日条。
 (51) 建保六年十二月二十一日条。
 (52) 建保七年(承元元年)正月二十七日条。
 (53) 承元元年閏二月一日条。
 (54) 承元元年三月九日条。
 (55) 承元元年三月十五日条。
 (56) 『百練抄』(『国史大系』第十一所収、吉川弘文館、一九六五年)。
 (57) 承元元年七月十九日条。この日の最後の部分には、次のような記述がある。「酉刻、有政所始、若君幼稚之間、二品禪尼可聽斷理非於簾中云々」と。
 (58) 『仁和寺日次記』(『歴代殘闕日記』第七卷所収、臨川書店、一九七〇年)。
 (59) 承元三年五月十九日条。
 (60) 承元三年五月二十五日条。
 (61) 注(33)に同じ。
 (62) 元久二年七月八日条。
 (63) 『吾妻鏡』及び『百練抄』。
 (64) 承久三年八月七日条。
 (65) 追加法(『中世法制史料集第一卷』所収、岩波書店、一九五五年)。
 (66) 貞応二年一月二十三日条。
 (67) 元仁元年六月二十八日条。
 (68) 元仁元年六月十三日条。
 (69) 元仁元年閏七月三日、二十九日、八月二十九日条。



北条政子お手植と伝わる柿の木
(写真提供 武藤賢吾氏)

- (70) 嘉祿元年七月十一日、十二日条。
- (71) 嘉祿元年七月二十七日、十月二十二日条。
- (72) 文治二年四月八日条。
- (73) 寿永元年八月十一日、十二日、十三日条。
- (74) 寿永元年十一月十日、十二日条。
- (75) 寿永元年十一月十四日、十二月十日、十六日条。
- (76) 元暦元年四月二十一日、二十四日、六月二十七日条。
- (77) 文治二年四月八日条。
- (78) 天福元年五月二十七日条。



源氏北条氏関係図